

72歳の年男

「往年を振り返って」想う事

篠田 芳明 陸自69

私がこの世に生を受けたのは大東亜戦争敗戦の翌年、1946年9月20日である。幼少期を奈良県のチベットとも言われる三重県との県境の長閑な山村で過ごした。

今から思えば相当質素な暮らしぶりではあったが、生まれた時の環境そのものが山間の寒村だったから、疑問もなく受け入れていた。さらに、日本経済の伸長と共に、暮らし向きが向上する時期であり、貧しい生活との意識は全くなく、悪戯仲間と野性的な遊びに夢中で楽しい日々だった。

しかし、中学校を卒業してから都市部の畝傍高校に進学。防衛大学校13期生として自衛官になったのを境に、人生は幼少期に想像もしなかった天と地ほどの大きな変化があった。

当時、同世代の若者は安保反対闘争に熱を上げるのが流行であった。

高校同級生数名も有名大学に進学後、時の流れに乗って学生運動で活躍していた様だが、その後の連絡は途切れ、同窓会等で顔を合わすことはない。

一方、防大に入校した私は、体が小

さく入校時の体力検定では殆どが級外だったため、上級生や指導官が「特訓」と称する温かい体力向上メニューを準備し連日鍛えて下さった。お蔭様で何とか同僚に交じり、基本教練や遠泳訓練等にもついて行けるようになった。

その成果はてきめんで、夏期休暇をもらって帰省した時、遠泳訓練で真っ黒に日焼けした私が真っ白な制服に身を包み、自宅の玄関に立った時、父母が「短時間の内にあのひ弱だった我が子の余りの成長ぶり」に驚嘆した様子だった。

そして、2年3年4年生へと進むうちに「これが青春だ」と思える爽快な気分と充実感が、私の体内に漲って来る様になったことを鮮明に思い出す。

前置きが長くなったが、私がここで述べたいことは「人を育てる」のに最も有効な方法についてである。振り返って「一体何が人格形成を最も促すのであろうか？」と自問して来た。結論として、防衛大学校での生活を通じて体験から「学年の異なる同世代の若者が混在した同室で生活し、同じ釜の飯を食い、自治によって切磋琢磨する日々がその味噌」だと確信するに至った。

学業・体力・気力等の精神面を厳しくも慈愛に満ちた教育をして下さる教官の指導は勿論素晴らしい。しかし、いくら素晴らしい教育者や親の指導で

も「きめの細かさ」とインパクト」に限界があると思う。

ところが防大生活では、下級生にとつて1年しか違わない上級生が眩しい程立派に見えた。必死でその様になりたいと努力する事で下級生は成長するが、実は上級生は下級生の模範になるうと強烈なプレッシャーを自分にかけており、その努力たるや下級生のそれとは「比べ物にならないレベルであった」と、この歳になって思う。そして、四六時中お互いに裸同然の共同生活に身を置く全ての仲間が頑張っており、一人ではできない程ハードな負荷を競い合つて自分自身に課す状態が継続する。このハードな負荷を克服するには、自分自身で考え行動する強固な自発性の継続が必要であり、これが人間形成に最も優れた教育法であると確信する。

特に多情多感な青年期において、「知識だけでなく実践を伴った」体験は極めて効果的であると思う。

時は流れ今年は戌年、72星霜に及ぶ命を繋いで来た私は、防大における錬磨で本来自分一人では到達出来ない程、遙かに高度な自発性を身に着ける教育を受けることが出来たと実感する。そのお蔭で今、心身の充実した日々を過ごさせて頂いていると思う。感謝と感慨を覚える今日この頃である。